

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007 年度 ～ 2009 年度

課題番号：19720176

研究課題名（和文）古代都城儀式の歴史的変遷にかんする研究

研究課題名（英文）Study on Historical Transition of Rituals in Ancient Imperial Palace

研究代表者

山本 崇（YAMAMOTO TAKASHI）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：00359449

研究成果の概要（和文）：

本申請研究は、古代都城の中枢に位置する大極殿とそこで行われる儀式の変遷を、成立から終焉までを対象に考察することを目的としている。その成果は、既刊『大極殿関係史料（稿）』の続編の史料収集、平城宮跡第一次大極殿院地区から出土した木簡を集成した正報告書などの史料集としてまとめたほか、古代都城儀式の史料と発掘遺構の検討を行い、平城宮第一次大極殿院の成立と変遷過程、平城宮中枢部分の機能と呼称などについて、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to examine historical transitions of rituals performed at Imperial Audience Hall (Daigokuden) in ancient imperial palace, from its emergence to collapse, as well as the change of the Imperial Audience Hall itself. In this study we examined historical materials related to the rituals performed in ancient imperial palace and unearthed archaeological features and remains. We clarified the process of formation and change of the Former Imperial Audience Hall Compound of the Nara Palace and the functions and names of several precincts in the central part of the Nara Palace. The result is published in the sequel of the "Historical Materials Related to Imperial Audience Hall" and the official report of the unearthed wooden writing tablets (mokkan) recovered from the Former Imperial Audience Hall Compound, Nara Palace Site.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	600,000	3,600,000

研究分野：日本古代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：古代史、都城儀式、発掘調査、大極殿、木簡、墨書土器

## 1. 研究開始当初の背景

2010年、平城遷都1300年を迎えた奈良では、平城宮第一次大極殿が竣工した。この間、復原研究と施設の活用を目的とした研究が行われており、研究代表者は、大極殿・朝堂院にかかわる文献史料の収集とその儀式次第の検討を担当し、その成果は、奈良文化財研究所『大極殿関係史料(稿Ⅰ)儀式書編』(2003年)『同(Ⅱ)編年史料』(2005年)の史料集のほか、「御齋会とその舗設」(『奈良文化財研究所紀要2004』2004年)として公表している。上記の史料集は、平安時代の儀式書のうち主要な大極殿儀式の次第を読み下し文で掲げ、儀式の理解に資すること、7世紀初頭の小墾田宮から元慶年間に焼失する平安宮の最初の大極殿までの関連史料を網羅的に収集し、その歴史的な変遷を概観することを目的として作成した基本史料である。

ところが、古代儀式の関連史料は限られており、その解明は、十分に史料批判を尽くした上で、平安時代史料から遡及的に検討することが必須である。そこで、治承年間に平安宮大極殿が三度焼失するまでの豊富な史料を網羅的に収集し、そこから古代儀式を復原的に検討することが必要と考えた。

## 2. 研究の目的

本申請研究は、古代都城の中枢に位置する大極殿・八省院とそこで行われる儀式の変遷を、成立から終焉までを対象に考察することを目的とするものである。具体的な課題は、

第1は、奈良時代の大極殿院関係史料の整理と検討であるが、とりわけ文献史料と発掘調査成果による遺構の検討により奈良時代の宮中枢部の様相を明らかにすること。第2は、この地域から出土した木簡の正報告を刊行し、史料の公開に努めること。第3は、平安時代末にいたる大極殿関係史料の網羅的収集を進め、既刊の史料集(稿)の続編を編集すること。以上の3点である。

## 2. 研究の方法

申請研究は、下記のように進めた。

(1)古代宮都の中枢部で行われる儀式の研究。奈良時代の儀式は史料に乏しいため、儀式書、儀式次第を記した部類記など平安時代の史料を活用するとともに、考古学的成果を取り入れ、発掘調査遺構の解釈を統合的に行うこととした。

(2)大極殿関係史料は、既刊の史料集と同じ基準で関連史料の網羅的収集に努めたが、次の2点につき方針の変更を行った。1つは、儀式書編で割愛した大嘗祭の関連史料を採録対象としたこと、もう1つは、9世紀以降に内裏儀となる儀式の関連史料は採録しなかったこと、である。

## 4. 研究成果

研究成果は以下のとおりである。

(1)古代都城儀式にかかわる文献史料と発掘調査の検出遺構・出土遺物の検討を行った。

平城宮第一次大極殿院の成立と変遷過程

を明らかにした(図書)。

大極殿院に南接する朝堂院で行われる大嘗祭について、平城宮で検出した6時期の大嘗宮遺構の検討から、廻立殿の定着が平安時代以降に降る可能性が高いことを指摘するとともに、平城宮中枢部の機能と宮の呼称、とくに中宮院の比定地を明らかにした(雑誌論文)。

(2)平城宮跡第一次大極殿院地区・中央区朝堂院地区から出土した木簡約5000点のうち、釈読可能な木簡1617点を集成した正報告書『平城宮木簡七』を奈良文化財研究所史料第85冊として刊行し、その編集を担当した(図書)。とくに木簡の樹種の細胞学的な観点からの樹種同定を試み、都城の木簡もヒノキ、スギ以外の多様な樹種に及ぶことを示した(図書、雑誌論文)。平城宮跡出土木簡の細胞学的観点からの樹種同定は初めてのことで、今後の資料の蓄積により、多様な樹種利用の様を明らかにできると予想される。

(3)大極殿・朝堂院(八省院)に関する史料収集を継続した。研究期間内に、ほぼ平安時代末までの史料の総めぐりによる史料収集を終えた。該当史料はカード化して整理するとともに、時代の古い史料からテキスト入力を行った。研究計画段階では、良質の写本による本文校訂を行うことを予定していたが、膨大な史料の収集に思いのほか時間を要したため、研究期間内の本文校訂作業は断念し、もっとも信頼のおける刊本からの収集にとどめることとした。このうち、平安宮第2次大極殿が完成した元慶3年(879)10月から最後の朝賀が行われる正暦4年(993)正月までの

史料は、既刊『大極殿関係史料(稿)』(現在2冊刊行)の続編となる3冊目の史料集として刊行予定で、研究期間内にA4判250頁分の草稿を作成した。今後、11世紀以降の史料の入力を鋭意進めるとともに、採録した史料の原本、ないし良質の古写本等による本文校正を行い、より完成度の高い史料集を作成するための作業を継続する予定である。

本申請研究では、平城宮中枢部の変遷とその歴史的意義を明確にするとともに、出土木簡、文献史料の網羅的収集からなる古代都城中枢部の基礎資料を作成した。平城遷都1300年にあたり、復原工事が終了した平城宮第一次大極殿と大極殿院の活用方法があらためて課題となっている現在において、その成果は、古代史研究のみならず史跡の活用方法の検討にも資することとなる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

山本崇・藤井裕之(共著)「平城宮木簡の樹種」奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2010』2010年6月、pp.66 - 67、査読なし

山本崇「平城宮の宮殿」『月刊文化財』第556号、2010年、pp.15 - 19、査読なし

山本崇「紹介 春名宏昭著『平城天皇』」『古代文化』第61巻3号、2010年、p.146、査読あり

山本崇「二〇〇八年出土の木簡 奈良・藤原宮跡」『木簡研究』第31号、2009年、pp.16 - 17、査読あり

山本崇「一九七七年以前出土の木簡(三〇) 奈良・平城宮跡」『木簡研究』第30号、2008年、pp.191-193、査読あり

〔学会発表〕(計2件)

山本崇「2007年全国出土の木簡」木簡学会第29回研究集会、奈良(奈良文化財研究所) 2007年12月2日

山本崇「2008年全国出土の木簡」木簡学会第30回研究集会、奈良(奈良文化財研究所) 2008年12月7日

〔図書〕(計7件)

奈良文化財研究所(責任編集・山本崇)『平城宮木簡七』(奈良文化財研究所史料第85冊) 2010年、図版175プレート、解説552頁

伊場木簡から古代史を探る会編『伊場木簡と日本古代史』六一書房、2010年。山本崇「墨書土器からみた伊場遺跡群」(pp.149-165) 「伊場遺跡群の主要墨書土器」(pp.192-198) の項執筆

浜松市生涯学習課(文化財担当)編『鳥居松遺跡第5次 伊場大溝編』(財)浜松市文化振興財団発行、2009年。山本崇「鳥居松遺跡出土墨書土器の概要」pp.169-172) の項執筆

糸里制・古代都市研究会編(編集委員館野和己・山本崇など14名)『日本古代の郡衙遺跡』雄山閣、2009年、369頁

奈良文化財研究所編『胡桃館遺跡埋没建物部材調査報告書』北秋田市文化財調査報告書第10集、北秋田市教育委員会発行、2008年。

山本崇「第 節付属調査 1 墨書資料の調査」(pp.62-70) の項執筆

浜松市生涯学習課(文化財担当)・奈良文化財研究所共編『伊場遺跡総括編 文字資

料・時代別総括』伊場遺跡発掘調査報告書第12冊、浜松市教育委員会発行、2008年。山本崇「第4章第2節墨書土器の再検討」(pp.65-78) の項執筆

『科学研究費補助金基盤研究(S)「推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」(研究代表者渡辺晃宏)研究成果報告書』2008年。山本崇「木簡出土点数の推移 『全国木簡出土遺跡・報告書総覧』補考」(pp.108-114) の項執筆

〔その他〕(計4件)

SSHサイエンス基礎講座I「日本古代を科学する」パネルディスカッション・司会山本崇(奈良(奈良女子大学附属中等教育学校)、2008年5月31日)

山本崇「木簡にみる都のくらし、但馬のくらし」(第1回特別展「遙かなる平城京」記念講演、兵庫県豊岡(日高農村環境改善センター)、2008年3月1日)

山本崇「平城京の地割(条坊)と糸里の地割」(平城京はいかに造られたか~平城遷都1300年講座、奈良(朝日カルチャー奈良)、2007年11月10日)

山本崇「奈良・万葉の魅力」(「万葉を愛した人物中村一作展」記念講演、高松(高松市歴史資料館)、2007年11月4日)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山本 崇 (YAMAMOTO TAKASHI)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：00359449